メリーゴーランド

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メリーゴーランド

【Ｎコード】
Ｎ２４５８Ｆ

【作者名】
イラル

【あらすじ】
少女が夢の中で出会ったのは一緒に寝たウサギの人形。ウサギの人形に案内されると、そこは遊園地。ウサギと少女はメリゴーランドに乗る。その夜はちょうど、彼女の妹が生まれるとき。

「うさぎちゃん。おやすみなちゃい。」

隣に寝かせたうさぎの人形。
生まれたときに父親が買ってくれた人形に少女はキスをしてベットに入った。
その夜はちょうど、彼女の妹が生まれるとき。
そして少女は夢の中。
淡い淡いピンク色の世界に彼女は立っていた。
一人で。

「ここ、どこ？」

あどけなさが残る少女の顔が曇る。
眉を額に寄せ、今にも泣き出しそうだ。

「ようこそ。夢の世界へ。」

「うさぎちゃん！」

そんな彼女の前に、一緒に寝たうさぎの人形がゆっくりと舞い降りてきた。
腕を前に差し出して、少女を誘う。
彼女は口元に当てていた手を、ゆっくりと片手だけ人形に差し出した。

「さあ、飛び立とう。」

うさぎの人形はしっかりと少女の手をつかんだ。
その手はやっぱり人形で、ふかふかとした感触が彼女に伝わる。
うさぎはピンク色の地面を蹴った。
すると、ゆっくりと舞い上げる。
手を握り合ったままの少女ももちろん舞い上がる。
彼女を無重力が襲った。
小さく悲鳴を上げたが、足元の風景に見とれて逆に感嘆の声をあげた。

「うわぁ、ちゅごーい！」

いつの間にか足元の風景は遊園地。
風船が飛んで、紙ふぶきが舞い光る。
たくさんの人形達がリズムに合わせて踊っているのが見えた。
それは、普通の遊園地ではなく、絵本に描かれているような。
そんな曖昧な遊園地だった。

「ねぇー、うさぎちゃん。こえからどこに行くのぉ？」

「メリーゴーランド。待ってる人がいるんだ。」

うさぎはそう言って少しづつ降下し始めた。
二人が行き着いた先には、何もなかった。
遊園地の中ではあるが、何もない。
そして、人形達も、人も居ない。
そこには緑の芝生が広がっているだけ。

「うさぎちゃん。メリーゴーランドないよ？」

「見えない？そっか。じゃあ、見せてあげる。」

うさぎはそう言うと姿をさっと消した。
かと思うと辺りがいきなり真っ黒になった。
本当に何も見えないくらい真っ暗に。

「う、うさぎちゃん！？」

少女はキョロキョロと不安そうに辺りを見ました。
けれど、真っ暗で何も見えはしない。
少女の目に涙が溜まる。

がたっ……ウィーン

いきなり、音が少女の目の前でした。
彼女はいきなりの音にびくっと身を震わす。
そして、手を口元に持っていき、震える体を懸命に抑えようとしていた。

「うっ…。」

何かが前に居る。少女は恐怖を駆り立てられながらじっと前を凝視する。
いや、固まって体が動けないのだろう。
ウィーンという音が絶えず前から聞こえてきていて、
少女はついに口を大きく開いた。

「うさぎちゃーぁぁあうわぁぁーん！！！」

涙がボロボロと流れ地面に落ちる。
落ちて
オチテ。
前なんか見えないんじゃないかってくらい少女の目から涙が溢れ出す。

「呼んだ？」

声とともにぱぁっと明るくなった。
視界が光で開ける。
少女はいきなりの出来事に息を止めて固まってしまった。
目の前にはキラキラと光り回るもの。
馬が左から右へと上下しながら去り行く。
ライトが交互に光ったり消えたり。
そして何より少女は、自分の目に溜まった涙で
光が反射して見えた。
それは、光り輝く美しい光景。
目を見開いて見てしまう。

「ひっく…。」

やっと息が出来ると、しゃっくりが少し出た。
そんなことは気にせずに、少女は両手で目をごしごしと拭った。
そしてもう一度よくその光景を見た。
相変わらず光り輝きながら回るそれを少女は知っている。
それは『メリーゴーランド』

「うさぎ…ちゃん？」

少女は声の主を呼んだ。その声は泣いてたせいか少し掠れていた。

「ここだよ。」

ちょうど馬車が左から現れる。
馬に引かれるようにして。
そこにはうさぎがちょこんと座っていた。
少女の目の前までくると、それらは止まった。
けれど眩しさは変わらない。

「乗って。」

うさぎがそう言って手を差し出す。
これでうさぎに誘われたのは二回目。少女は今度は手を出さない。
また怖いところに連れて行かれるのではないかと。
不安に思っているのが顔に出ていた。
額にしわを寄せ、顔を下にし目で上を、うさぎを見上げるように見ている。

「大丈夫。メリーゴーランド好きでしょ？」

うさぎは降りてきて優しく少女の手を取った。
少女よりも小さいうさぎは彼女が歩き出すのを確認すると、早足で彼女とともに馬車に乗った。

「メリーゴーランド…好き。」

少女は乗った後ぽつりと言った。
メリーゴーランドは回り始める。

「パパとママに手を振るのよ。ちょれが好き。」

彼女はまた目に涙を浮かべた。
そして下を向いてしまう。

「うん。知ってるよ。ねぇ、僕と乗るのは嫌？」

うさぎは少女の前に腰を下ろしたまま聞いた。
少女は首を横に振る。

「うさぎちゃん。あたちね、ずっとここにいたい。」

少女は途切れ途切れに言った。
うさぎは首を傾げて少女を凝視する。
その顔は無表情ではあるが、どこか寂しそうにも見えた。

「このメリーゴーランド。メリーゴーランドだから同じとこをぐるぐる回るよ。
ねぇ、それでもいたい？」

「だって……メリーゴーランドってそういうものでちょ？」

「あのね、僕はずっとこのメリーゴーランドに乗ってるんだ。
ずっと何も変わらない。この上に乗ってればずっと何も……。」

少女が顔を上げたのと反対に、今度はうさぎが顔を落とした。

「変わらないけど、周りにいる人は変わっていくよ。
僕はこのメリーゴーラーンドで同じところをぐるぐる。
けど、他の人は行ってしまう。この遊園地を通り過ぎてどこか遠くへ。」

うさぎは顔をあげようとはしない。
そして話を続けていく。
少女は、うさぎから目を逸らし外を見た。
ゆっくりと動く世界。
けれど、何度目かに戻ってくるその風景。

「最後には手を振ってくれる人もいなくなる。」

「寂しいのね。うさぎちゃんは寂しいのね。」

「うん。ここは寂しいところなんだよ。」

少女はまた目頭が熱くなるのを自分で感じ取っていた。
そして、うさぎの手をとった。

「じゃあ、行こうよ。メリーゴーランドからでまちょう！」

うさぎの手を持ったまま、少女は地面を蹴った。
ふわりと地面が離れていく。
手を繋いだ二人は、メリーゴランドを下へと置いていき、空高くへと舞い上がった。

「……ねぇ、たまには僕とメリーゴランドに乗ってくれる？」

うさぎはメリーゴーランドを見つめながら少女に聞いた。

「たまには、同じ場所をあの綺麗な乗り物で回ってみたいよ。」

「うん。もちろんだよっ。一緒にみまちょう！」

「ありがとう。お姉ちゃん。」
うさぎはそう言って少女の手を引き離した。
そして、少女の耳に残ったのは。
「また、メリーゴーランドから抜け出そう。お姉ちゃん。」
だった。
少女は落ち行くうさぎを目で追った。
追ったけれど、次の瞬間目の前の景色は車の天井だった。
「ありぇ？」
「起きたか。見里。」
低い声。少女は起き上がって辺りを見回した。
「パパ……どうちて車の中なの？」
「生まれたんだよ。見里。妹だ。これから見里はお姉さんだな。」
車を運転しながら少女の父は嬉しそうに言った。
そして、彼女は自分の手に当たったものを見た。
それはうさぎの人形。
「ねぇ、パパ。あたち、この人形その子にあげるっ。」
車の前座席に身を乗り出して彼女は言った。

「お気に入りじゃなかったのか？その人形。」

「いいのっ！」

彼女は嬉しそうに父に笑んだ。
父も丁度赤信号で止まると、彼女の頭をくしゃっと撫でた。
何年か後、彼女がその子とメリーゴーランドに乗ったのは言うまでもない。

「お姉ちゃん、手を振ってくれる人がいるっていいね。」

「でしょ。」

二人で父と母に手を振って。
はちきれんばかりの笑みで。
幸せそうだ。
そして、うさぎが彼女に見せたかったのは自分で。
彼女はきっと何か大切なことに気づいたに違いない。
今日もメリーゴーランドは誰かを乗せてぐるぐると。
回っているに違いない。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2458f/

メリーゴーランド

2010年10月17日06時55分発行